哲學研究　第百十六號

社會と模倣

銅直勇

タードは模倣といふことを以つて社會の本質、社會の原因、又社會の元素的事實であると見、社會は卽ち模倣であるといつた。然し模倣を以つて社會の本質であると見る彼の說の直に首肯し難いといふことに就いては他の機會に於いて述べたから今こゝに繰返さない。然し彼がいふ如く模倣は社會の最も元素的なる作用、又は社會構成の心的因素であると考へこの模倣作用が社會及び社會意識の成立過程に重要なる役目をなして居るといふことに就いて次に少しく述べて見たい。

吾々が今社會の本質又は本質的特徵といふのは社會を構成する原因又は因素の上から見ることなく、飽迄も社會といふものゝ現にあるがまゝの事實の上に立脚して、社會をして凡ての非社會的なるものから區別せしめ、且又これなくしては到底社會なるものゝ存在を考ふることの出來ない特質をいふのである。然らばこの社會の本質といふことゝ、謂ふ所の元素的事實なるものとは如何なる相違があるか。

吾々は社會現象從つて又社會成立の第一の要件として心的相互作用說をとる。然るに今この心的相互作用なるものは、或る一の精神が他の精神の上にそのまゝ或は又多少不完全なる形に於いて傳達再現さるゝ二個の過程に分析することが出來る。

さうして社會現象としてこれは實に最後の分析であり、又すべての社會現象は結局この最も簡單なる過程にまで解きほぐすことが出來る。故に吾々はこの單邊的意識過程を以つて、社會現象又は社會の最も元素的なる作用であるといふことが出來よう。然しながら勿論この單邊的事實だけを以つては未だ完全に結合關係が成立したといふことは出來ない。aとbとの間に或種の相互關係が生した時こゝに始めて社會關係なるものが完全なる形に於いて成立したといふことが出來る。然るに社會に於いて心的相互作用を組成するこの二個の單邊的なる反復作用、卽ちこれがタルドの所謂模倣なるものである。これ私が模倣といふことを社會の本質と見る見解に反對しながら猶タルドの如く模倣を以つて社會の最も元素的なる作用であると見る所以である。然し吾々が今社會從つて又社會意識の成立に先づ第一に模倣の作用が如何に重要なる役目をなすかを考察せんが爲めには、この模倣の概念の如何なるものであるかを明確に決定するの必要がある。

元來タルドの模倣の概念は一見餘りに茫漠として精確を缺くが故にこれと類似の概念卽ちsuggestion; sympathy 等との區別如何といふ點について諸家の間に種々の意見がある。タルド自身は模倣も暗示も同一の過程であつて唯前者はこれを受動者の側から見、後者はこれを發動者の側から見たものに外ならぬと考へるが、然しマクヅガルは同情をもつて感情の反覆、暗示をもつて觀念又は信念の反復、模倣をもつて單に身體的の動作が反復さるゝ場合に限定した。彼の如く模倣を單に身體運動の反復であると考へるのは吾々が常識に於いて模倣といふ考と相一致し、模倣なる概念を最も明確ならしめたやうに考へられる。吾々も亦マクヅガルの如く模倣をもつてある一の表現が他の人

に於いて或る外部的に知覺し得らるゝ表現として反復さるゝ場合を模倣であると考へたい。然しながら吾々は彼の如くに模倣をもつて單に身體的運動の反復に限り、これを以つて信念又は感情の反復としての暗示及び同情と對立的なる概念であると見る考に反對する。タルドに於いては觀念、判斷、意欲、計畫等凡てある一の精神內容又は身體的行爲が他の精神又は身體の上に反復再現さるゝことを模倣といふのであるが、今或るaなる一の精神が他のbなる精神に傳達再現せらるゝに當り、それが只精神內の表象たるに止り何等外的表現を伴はない場合は、その影響は只bなる人が自己の腦裡に獨り之を知るだけであつて餘他の何人もその影響を覗ひ知ることは出來ない。aなる人の影響はbなる精神中に深く埋沒し或は永久に消滅して了つて、他の人々に何等の影響を與へることなく從つてそれは社會學的重要性を有しない現象であるといはねばならぬ。然るにかやうなる心的過程もタルドに於いては模倣の概念の中に入れられるのであるけれども、かゝる模倣の概念、卽ちたゞaなる觀念のbに於ける印象それのみでは、それは社會現象ともならず又結合關係をも生じない。然るにbがその印象に對して拒否又は受容の態度を決して、之れを外部的に表現するに及びこゝに始めて社會關係が成立し、aとbとの間に反結合的又は結合關係が判然として現れる。これ吾々が前にタルドの模倣を以つて社會の本質であると見る說に反對したる一の理由である。吾々は尙模倣の概念を明にする爲めにタルドが模倣なる概念を如何に考へ又如何に記述して居るかを檢して見たい。

彼は Études de sociologie sociale, p. 64 に於いては元素的社會事實とは或る一の意識的生類の行爲によつて他の意識的生類に及す或る一の意識狀

態の傳達或は變形 Communication ou la modification であるといひ、同六十五頁に於いては社會的諸事實の共通特性は模倣的なることこれであるといつて居る。卽ちこれによつて考ふる時は彼は模倣と傳達とを同樣に考へて居たものといはなければならない。卽ち傳達とは或る一の表象が他の精神にそのまゝ或は又多少不完全に印象さるゝことを意味し、必ずしもその影響がbに於いて外的に表現されることを意味しない。故に吾々が上に述べたやうに模倣をもつて或る表現卽ち何等かの身體的運動として再現さるゝことを意味するとしたならば傳達卽ち模倣であるといふことは出來ない。そして吾々が今暗示又は同情なるものゝ性質を考へるに、それは或る信念又は感情等がaからbの精神に傳達され、然かもそれがbに於いて何等の外的表現を伴はない場合があることは勿論である。卽ち吾々の模倣の定義によるときはかくの如きは吾々の謂ふところの模倣と考へることの出來ないものである。吾々は卽ちこの點まではマクヅガルの說に贊成する。然し吾々は尙精密に考へると、かやうな暗示の感受又は同情の場合に於いてもそれが同時に外部的表現を伴ふことがあり得る。否實際に於いてはかゝる場合の方が前の場合に比して更に普通の事實である。卽ちある暗示に反應して直ちにある動作に及び、他人の泣くを見て自らも亦泣き、他人の笑ふを見て同時に又笑ふ。卽ちaなるものゝ表現をbが受容し同時にこれと同樣なる表現をなしたる時、そのbに於ける再現をa及び其他のc、d、e……も亦これを知り、かやうにして相互的の作用が愈々複雜に進行するにつれ社會現象も亦愈々複雜となる。卽ち暗示の單なる感受、感情の單なる傳達としての同情に止つて、それが何等の外部的表現を伴はない場合に於いては、かやうな暗示、同情は吾々の社會的意義に於

ける模倣概念中に包攝せらるゝことの出來ないものであるが、それは又同時にある外部的表現卽ち何等かの身體的運動を伴ふ場合が最も多く、從つて暗示同情にして同時に又模倣であると考ふべき場合もあるといはなければならない。この點に於いて吾々はマクヅガルが模倣を以つて單なる身體的運動の反復であると見、從つてそれが暗示又は同情と相容れざる概念であるといふ說に反對するものである。

上述のやうにタードの模倣の概念は諸家の等しくいふやうにその概念決定に於いて稍明確を缺くものといはなければならぬ。彼が傳達卽ち模倣であると見る見解の直に贊成し難いことは吾々の既に述べた通りである。然しタードの所謂模倣なるものは吾々が屢々いつたやうにある一の精神が他の精神に於いてそのまゝ反復再現せらるゝことであるからして、今彼の概念を徹底せしむるときは

次のやうになると思ふ。卽ちaといふ或る精神的內容が他のbといふ精神に傳達再現さるゝには必ずやaといふ精神的內容が外的表現性を伴ふことがなければ、それがbに傳達せらるゝ理由はない。故にaといふ精神的內容が他のbといふ精神にそのまゝ傳達再現されるといふことは、又bに於いてもその再現せられた精神的內容がaに於けると同樣又は同じき意味の外部的表現性、卽ち何等かの相類似した身體的運動を伴ふものと考へなければならないであらう。卽ちタードの模倣の概念を論理的に徹底せしめる時は、以上述べて來た吾々の結論と同一の結論に到達しなければならない。卽ち吾々は模倣の概念を單なる行爲の反復と考へる解釋をとらず、又模倣と傳達とを同一視する見解をも排斥する。要するに模倣とは或る行爲又は或る種々なる精神狀態が他のある人の精神內にそのまゝ又は多少不完全な形に於いて傳達再現され

且つその影響が同時にその影響をうけた人に於いて發動者に於けると略同樣な外部的表現として反復さるゝことを意味するものとしなければならぬ。

かやうにしてaなる人の印象がbなる人にそのまゝ再現せられ、そしてそのbなる人の影響の表現がやがて又aなる人に複現せられて、動と反動とが交互にくりかへされ、愈複雜に又愈持續的に存續發展さるゝものである。然しaなる印象は只bに於いてのみ與へらるゝものでなくして、他のc d、e……に對して同時に略同樣の印象を與へこれ等c、d、e……も亦夫々印象の中心となつて恰も太陽が八方にその光線を投ずるやうに、或は池中に投ぜられた石を中心として、その周圍に無限の波紋を描くがやうに、その接近するところのものにある印象又は影響を與へて、反復又反復轉々又轉々して無限に進行し、この眼に見えぬ模倣の系が同時同處の人と、處を隔て時を異にする人々とを問はず、無限の人々をその脈絡網羅の中に繫ぎ入れ、社會の活動はこれ等の模倣の系を傳ひ、これ等の脈絡網羅に結ばるゝ人々を通じて傳達傳播進展して行くものである。

吾々は以上模倣なるものゝ概念を決定し且つその性質一般について略說した。以下模倣が社會意識の成立に如何なる役目を演ずるかについて尙少しく述べなければならぬ。吾々は他の機會に於いて社會意識の本質について述べたやうに、社會意識は社會成員が類似共通又は相一致せりとの相互的意識の上に成立するものである。卽ちこの共通類似又は相一致せりとの相互的意識、これが社會の本質をなす。さうしてかやうな相互意識の成立に對し模倣は不可缺なる重要な作用をなすものである。

タードはその Lois sociales. p. 34—35 に於いて

曰く、「個人的勢力をして社會的一全體を形成せしむるこの方向の一致なるものは如何にして生ずるか。それは偶然の會合、或は一種の豫定調和によつて自然的に生ずるものであるか。否かくの如きは極めて稀有の例外に過ぎない。然し人若しこれ等一見例外の如く思はるゝ事例に對して尙追究して行く時は、これ等のものも猶一定の規則に從へるものであることを確認するに至るであらう。卽ち最も紛亂せる如く思はるゝ場合に於いても、猶社會生活の根柢を形成する諸の精神及び意志の微妙なる合致があり、又一定の時代一定の社會の凡ての精神及び意志の間に、多くの精密なる觀念目的及び手段の同時的に存在することがある。然もこれ等は有機的遺傳の結果として生れたる故でもなく、又地理的環境の同一なるが爲めに同樣なる能力のものが同樣なる物質を與へられた爲めでもない。それはある單一なる思想或は行動を有するある原始人から發し、それが次々にその隣人に傳はれる暗示模倣の過程の結果である」と。卽ち彼によれば社會成員の共通なる意識內容は始めある個人から創始せられ、それが幾何級數的に次々に傳播反復した結果として生じたものと考へるのである。これに對しては更に批判すべき諸點があるが、然し今只相互意識そのものが如何にして成立したかといふ問題について考察を下す時は、それは實にタードの說けるが如くに模倣の結果であると考へらるゝ。卽ちこゝにその意識內容を同じくする如何に多くの人があつたとしても、その共通類似を意識しなければ凡てこれ路傍の人である、無關係沒交涉の人々である。然るにその中一人あつてある自己の表示をなし、他のb、c、d……が同時にこの印象を受容して再びその印象を受容したことを外的に表現し、そしてその表現したる所をa、b、c、d、e……が互に認識した

とせよ、これ等の人々は卽ちこゝに彼等の意識內容の類似共通又は一致せることを互に認識し、こゝに社會及び社會意識が成立するのである。卽ち社會成員の意識內容の共通類似又は一致はこの模倣の過程によつて相互的意識となり、又この過程によつてその共通又は一致の程度が益々その强さを加へる。模倣作用は社會意識の成立過程に不可缺の一要素である。

然し吾々は次に社會及び社會意識の成立と模倣との關係に就いてのギディングスの有力なる批評に就いて考察して見たい。卽ちこれは模倣なるものは必ずしも社會のみを生じないと云ふ非難である。思ふに先づタードの模倣を印象傳達の過程であると考へる時はこの批評は當つてゐると考へられる。そしてタードは模倣といふことを實際かやうに考へて居たと思はれるので、吾々も亦かゝる見地からタードが模倣をもつて社會の本質であると見る見解に反對した。然し吾々はギディングスが次の例をあげてタードの模倣說を攻擊してゐるのは必ずしも正當でないと信ずるものである。卽ち梟は駒鳥の啼聲を模倣するけれども、これは前者が後者を殺して自己の餌とせんが爲めに後者を誘ふものであつて、そこには何等結合の意思なく從つて又何等社會的結果をも生じない。模倣は又反社會的結果をも生ずるものであると。(Principles of Sociologie. p. 16) 然しながらこの批評は必ずしも當らない。何となれば梟が駒鳥の啼聲を模倣し駒鳥がその聲によつて同類であると考へて相接近する時、卽ちそこには既にそれ丈けの程度に於いて社會關係が成立せるものである。然しその結合關係が極めて一時的であつて忽ち反社會的結合に變じ、その結合關係が極めて微弱なるが爲めに一見結合關係は成立して居ないやうに考へらるゝけれども、事實を嚴密に分析する時は必ずしもさうで

ない。且つこの結合關係が忽ちに反社會的關係に變ずるは模倣のためでなくして――その機會因となることはあるけれども――模倣關係の成立する以前既に梟のもつてゐた本能のためである。然るにギディングスは尙他の有力なる一事實をあげて反對した。卽ち曰く、二人あり互に爭うて一人が他を撲つた時　他も亦本能的にこれを撲返す。又二軍あり互に戰ふ時、一軍がある策略に出づる時は他も亦これに倣うて同樣なる術策を用ゐる。卽ちこれ模倣であるが、この二者はかく模倣するが故に社會をなして居ない。模倣はこの場合に於いて爭鬪の一部分である。卽ち模倣は一切の社會活動の一因素であるけれども、その特質と見るべきものではない。(op. sit. p. 103)

然しタードはこの事實を認めつゝも尙かつ爭ひつゝ、模倣する爲めに自ら多くの他のより重要なる模倣、例へば言語、法律、思想、知識、風俗、習慣等の模倣を誘致し、これが爲めに却つて將來の融合を生ぜしむる地盤を作るものである、卽ち戰爭は融合の始めであり、ギディングスのあげたる事實は却つて自己の見解を確めるものであると考へた。思ふにこのギディングスの批評は或る場合には確に事實として承認することが出來る。模倣は社會の最も元素的なる信用又は社會構成の一心的因素であつて、社會及び社會意識の成立に重要なる役目を演ずるけれども模倣は必ずしも結合關係のみを生ずるものではない。

次に吾々の考ふべき點はタードのいつてゐるやうに、社會構成の基礎である共通類似は凡て模倣の作用から起るものであるかといふことである。例へば何等交通の形迹を發見することの出來ない遠隔の地に生活する民族の間に存する風俗習慣その他諸種の社會現象に於いて吾々は往々種々なる類似を發見し得るものである。卽ち社會に於ける

類似にして必ずして模倣作用の結果でないものも少くないのである。然しタードによればかやうに模倣に關係のない、自然的境遇の類似又は人類の生物的要求の同一から生ずる類似は生物學的類似であつて社會學の研究に重要なるものでなく、それは生物學の研究に屬すると考へられると。然しながらこの見解はとることが出來ない。卽ち社會には模倣以外の原因から生じたる類似も多く、そしてかゝる類似が又社會の成立に重要なる要素をなしてゐることを見る。類似は模倣以外に遺傳及び自然的又は社會的境遇の類似共通なるがために生じたるものも少くない。そしてこの地理的及び生理的類似は實に社會生活の主なる基礎をなすものであつて、社會及び社會意識の成立をその究極の點まで追究する時は、これ等の類似が心的類似の根底に横つてゐることが發見されるのである。吾々はこれを無視しては到底社會生活を十分に理解することは出來ない。然し飜つて考ふればかやうな地理的及び生理的類似が如何に存するにせよそれのみでは何等社會を成立せしむることは出來ない。これ等の類似を基礎とし、その間に共通類似の相互意識、卽ち社會成立の間に反復模倣の作用の行はるゝに至つてこゝに社會意識の成立あり、又模倣の過程に於いて心的共通類似の度が一層大となるものであるが故にこの點に於いてはタードの見る所が眞を得てゐるといはなければならない。模倣の作用は實に社會及び社會意識の成立過程に甚だ重要なる役目をなすものである。